

8月定例教育委員会会議 議事録

令和4年8月17日
午後3時30分開会
さんくす3番館5階第1会議室

出席委員

西川俊孝 教育長
福田知弘 委員
飴野仁子 委員

安達友基子 教育長職務代理者
和田光代 委員
谷池雅子 委員

出席説明員

山下栄治 学校教育部長
道場久明 地域教育部長
角田睦 学校教育部次長 学校教育室長兼務
草場敦子 教育センター所長
福井将人 教育センター所長代理・指導主事

大江慶博 教育監
落俊哉 学校教育部次長 教育総務室長兼務
堀哲郎 地域教育部次長 放課後子ども育成室長兼務
田中満明 教育総務室参事
小林重信 教育センター主幹・指導主事

8月定例教育委員会会議 議事録

午後3時30分開会

西川俊孝教育長

ただいまから8月定例教育委員会会議を開催いたします。

署名委員に安達職務代理者を指名いたします。

それでは本日の傍聴席の数について事務局から説明してください。

落俊哉学校教育部長教育総務室長兼務

本日の傍聴席の設置可能数は10席でございます。現在の傍聴希望者数は2名でございます。

西川俊孝教育長

それでは、本日の傍聴は10名まで許可したいと思いますが、いかがでしょうか。

全委員

異議なし。

西川俊孝教育長

異議なしと認め、本日の傍聴は10名まで許可します。傍聴者の入室を許可します。

－ 傍聴者入場 －

落俊哉学校教育部長教育総務室長兼務

恐れ入りますが、追加議案を提出させていただきたいと存じますので、よろしくお取り計らいいただきますよう、お願い申し上げます。

西川俊孝教育長

ただ今、追加議案の提出の申し入れがされましたが、議題とすることに御異議ございませんか。

全委員

異議なし。

西川俊孝教育長

異議なしと認めます。

それでは、議案書を配布してください。

－ 議案書配布 －

西川俊孝教育長

それでは、日程第1、報告第18号「吹田市教育委員会事務局職員の人事発令について」を議題とします。

事務局の説明を求めます。

田中満明教育総務室参事

日程第1、報告第18号「吹田市教育委員会事務局職員の人事発令について」御説明申し上げます。

本件は、令和4年8月1日の人事発令につきまして、吹田市教育委員会の権限に属する事務の教育長に対する委任等に関する規則第4条第2項の規定に基づき臨時に代理させていただきましたので、御報告を申し上げるものでございます。

恐れ入りますが、議案書の3ページをお願いいたします。

対象者につきましては、教育委員会事務局に任命したものが1名、教育委員会事務局内異動となったものが8名でございます。

以上、よろしく御承認賜りますようお願い申し上げます。

西川俊孝教育長

それでは、この件について、質問・御意見はございませんか。

西川俊孝教育長

それでは、この件を承認することに御異議ございませんか。

全委員

異議なし。

西川俊孝教育長

異議なしと認め、報告第18号「吹田市教育委員会事務局職員の人事発令

西川俊孝教育長

小林重信教育センター主幹・指導主事

について」を承認します。

次に、日程第2、議案第42号「令和4年度全国学力・学習状況調査 調査結果の概要について」を議題とします。

事務局の説明を求めます。

日程第2、議案第42号「令和4年度全国学力・学習状況調査 調査結果の概要について」御説明申し上げます。

今年度4月に実施いたしました「全国学力・学習状況調査」につきまして、各校で、本年度2学期以降の教育活動に反映させることをねらいとし、データの分析を進めてまいりました。

恐れ入りますが、令和4年度全国学力・学習状況調査調査結果の概要（案）をお願いいたします。

調査結果の概要といたしまして、本調査の目的を達するため、本市教育委員会による教育施策の改善、学校自ら教育活動及び各児童・生徒の全般的な学習状況の改善等に繋げるという視点、生活習慣や学習環境等に関する調査についても重視し、教科結果との関わりを分析するという基本方向に従って作成いたしました。

調査結果の概要1ページをお願いいたします。

「はじめに」におきましては、総合的人間力の育成の視点と、今後の取組の方向性を示しております。なお、今年度は平成30年度から4年ぶりに理科が実施されました。

続きまして、調査結果の概要2、3ページをお願いいたします。

概要の作成に係る分析方法及び分析結果について御説明させていただきます。学力学習状況調査の全体の概要として、校種・教科別正答率と正答数分布、内容別正答率及びこれらの全国比を掲載しております。今年度も、本市において、すべての教科で平均正答率が全国を上回りました。

続きまして、調査結果の概要4ページから7ページをお願いいたします。

「吹田の子供のチカラを伸ばす」と題し、吹田の子供達の「持つチカラ」と「つけたいチカラ」を示したうえで、今後の教育活動に向けて有効と思われる視点をお示ししております。吹田の子供達の「持つチカラ」については、全国値より肯定的回答率が高い質問内容を通して見える子供の姿から、「主体的に学び、表現しようとするチカラ」としてしております。そして、子供達に「つけたいチカラ」としましては、時代を生き抜く児童・生徒にメタ認知力共感力の視点から、「自分で計画を立てるチカラ」「自分との違いを認め合うチカラ」「メディアバランスについて考え、行動するチカラ」の3つといたしました。

続きまして、調査結果の概要8ページから10ページをお願いいたします。

校種・教科別に分類区分別集計結果、正答数分布グラフを示しております。教科に関する調査結果の概要としましては、内容領域に着目しますと、

国語は「書くこと」、算数・数学はC領域、(つまり小学校の「変化と関係」それに繋がる中学校の「関数」)、理科はA区分の「エネルギーを柱とする領域」が小中学校ともに低い結果となっています。

また、問題形式としましては、いずれの校種・教科においても記述式の正答率が低くなっています。

続きまして、調査結果の概要 11 ページから 28 ページをお願いいたします。

校種別に各教科の問題別分析を掲載しております。まず、調査結果のまとめの構成について、小学校国語を例に御説明いたします。

11 ページを御覧ください。

問題別正答率や、無回答率、また、それらの全国値との比較を掲載しております。正答率、無回答率と全国の差を同ページの枠内の記号でお示しております。

続きまして、12 ページを御覧ください。

全国値を下回った問題や、正答率が低かった問題、無回答率の高かった問題を取り上げ、どのような点でつまずきが見られるのかを分析しております。

続きまして、13 ページを御覧ください。

「Pick up」といたしまして課題の見られる設問について詳しく解説しております。また、改善に向けた手だて等について、今後の指導の取組に生かすこととして掲載しております

それでは教科別に課題について御説明させていただきます。

12 ページから 16 ページを御覧ください。

国語につきましては、小・中学校ともに学習内容「書くこと」に課題が見られました。

12 ページを御覧ください

小学校では正答率が 5 割以下の設問から見える課題の 2 問目、互いの書いた文章を読み合い、具体的に感想や意見を伝え合うことを通して、よさを見つけたり、良さを言葉に表したりすることに、課題が見られました。

続きまして、15 ページを御覧ください。

中学校では正答率が全国を下回っている設問から見える課題として挙げられている、考えの根拠が明確になるように資料から必要な情報を引用して意見文を書くこと及び引用の仕方や出典の示し方について課題が見られました。国語の Pick up 問題では、思考力、判断力、表現力等の内容の一つである、「読むこと」を挙げています。小学校、中学校ともに、文学的な文章が出題されましたが、正答率は 7 割を切っていること。また、現行の学習指導要領では、特に学習過程について、より明確に示されたことから、あえて取り上げることにしました。

次に、算数・数学についてです。

17 ページから 22 ページを御覧ください。

小・中学校ともに学習領域 C、小学校では変化と関係、それに繋がる中学校では、関数において課題が見られました。この変化と関係と、データの活用は、数量の変化に着目した考察を重視するとともに、統計教育の基礎を充実させるために、現行の学習指導要領において新設された領域です。小学校では変化と関係を、中学校では、データの活用を、更なる Pick up 問題とし

て取り上げています。

次に、理科について御説明いたします。

24ページから28ページを御覧ください。

小・中学校ともに、エネルギーを柱とする領域に課題が見られました。

24ページを御覧ください。

全国値を下回った設問から見える課題、そして正答率が5割以下の設問から見える課題の4問中3問になっており、そのうちの1問をPick up 問題として取り上げています。中学校においてはPick up 問題として地球を柱とする問題を取り上げています。平面図から空間を認識し、分析して解釈する力を導入した端末機を有効活用するなどして、授業改革をしていく必要があると考えたからです。エネルギーの指導にあたっては、実験の結果から得られた性質や、働き、規則性などを活用したモノづくりを充実させるとともに、エネルギー、粒子といった科学の基本的な概念などを柱にして、内容の系統性が図られる必要があるため、教職員研修を通して、学習指導要領に基づく授業づくりをさらに充実するよう取組を進めてまいります。

続きまして、29ページを御覧ください。

児童・生徒質問紙の教科に関する質問のうち、国語、算数・数学、理科に共通する項目を掲載しております。ほぼすべての項目において、小学校に比べ、中学校では肯定的回答率が下がっています。また、教科の勉強が好きですか、の項目に肯定的な回答をしている割合が、小学校理科を除き、約6割と低くなっています。この課題を解決するためには、まず、誰一人取り残さない児童・生徒にとってわかりやすい授業や、児童・生徒が授業を通して何ができるようになったのかという、自らの成長を実感したり、学んだことと、実生活や社会とつながりを実感したりすることができるような授業を行い、そこに面白さを見出せるようにする必要があります。そのような授業づくりを行う文化を吹田市に築くため、今年度より、年間を通じた連続講座である「能力ベース」の授業づくり実践講座を開設しております。

続いて、30ページ、31ページを御覧ください。

児童・生徒質問紙の教科に関する質問のうち、算数・数学、理科においてのみ、問われている項目を掲載しております。算数・数学においては、すべての項目において肯定的回答率が、令和3年度と比較して低くなっており、理科については前回実施した平成30年度と比較してすべての項目において、高くなっています。その中で特に、「学習したことを、日常生活において活用しようと考えよう」とについては、肯定的回答率が小学校では7割、中学校では5割程度にとどまっていることから、学習と日常生活を関連付けることで、学ぶことの価値を児童・生徒が実感できるように授業を変えていく必要があると考えます。

続きまして、32ページから34ページを御覧ください

基本的な生活習慣等について、挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等について、経年変化、継続確認項目といったカテゴリーで、児童・生徒質問紙の回答状況をまとめております。

32ページを御覧ください。

コンピューターなどの使い方について、家の人と約束を守っている割合は、全国値を上回るとともに、令和3年度からも増加しているものの、約束はないと回答している割合が、小・中学校ともに1割程度となりました。本市では、昨年度より全小・中学校において、端末の持ち帰りを前提とした、9年間のカリキュラムに基づいて、デジタル・シティズンシップ教育を実施しており、児童・生徒が共感力を働かせながら、ウェルビーイングの視点で立ち止まって考え、ICTをより善く使うことのできる力を育てています。コンピュータ等の使い方について、保護者と話をしながら、約束を考える取組もカリキュラムに位置付けていることから、今後取組について、保護者や地域への周知に努め、取組の更なる充実を図っていく必要があると考えております。

続きまして、33ページを御覧ください。

「人が困っているときは進んで助けますか」の肯定的回答率が令和3年度から増加しているとともに、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対する肯定的回答率は9割以上となっています。これは、本市が令和2年度から取り組んでいるいじめ予防事業において、児童・生徒がいじめに対する正しい知識を身に着けるとともに、自分自身が困ったときや、他の人が困っている場面に出会ったときに、近くの大人に助けを求めるというスキルを身に付ける学習を行ってきた成果であると考えていますので、今後も継続して取り組み、意識の醸成とスキルの向上を図っていきます。

続きまして、34ページを御覧ください。

「将来の夢や、目標を持っていますか」に対して、当てはまる、と回答した割合が、小学校では約6割、中学校では約4割と低くなっております。これは、学校における教育活動において、将来の夢や目標について考える場が少ないことや、目標とする身近な大人モデルとの関わりの少なさが影響していると考えられることから、学校においてこれまで以上に夢や目標について考える場を設定する必要があると考えております。このページに挙げております3項目につきましては、今後も児童・生徒の回答状況について、経年変化を見取り、分析してまいります。

続きまして、35ページを御覧ください。

Society 5.0の到来に向けて、必要な力を見据え、本市として、育成を目指す総合的人間力を児童・生徒が身に付けるため、教育ビジョンの施策として、豊かな心の育成と人権教育の推進、確かな学力の育成、生徒指導の充実の3観点を挙げ、その一体的な充実を図るため、学校における教育活動のベースとなる取組や、授業改善に関する取組を進めてきました。ホームページでは、これらのことについて、文章とともに、図を用いて整理し、お示ししております。

最後に、結果公表についてですが、教育だよりに調査結果の概要などを掲載し、発信を行う予定であります。また、教育センターホームページにも掲載します。各学校に対しましても、本市の分析結果も参考にしたいうえで、事

項の分析を進め、取組の成果や課題を明らかにし、教育活動に生かすとともに、保護者、地域に対しても説明を行うよう指示する予定です。

以上で令和4年度全国学力学習状況調査結果の概要についての説明とさせていただきます。

御審議いただき、御承認賜りますようよろしくお願い申し上げます。

西川俊孝教育長
福田知弘委員

それでは、この件について質問・御意見はございませんか。

5ページにつきまして、「吹田の子供達につけたい3つの力」ということで、分析を行い、相関をとられているかと思われます。例として「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか(学校の授業の予習や復習を含む)」という質問に対するデータに対して算数・数学の正答率と比較をしておりますが、これは算数・数学の1教科のみでよろしいのでしょうか。国語、理科ともに質問・データがあると思われますが、どのようにお考えでしょうか。

小林重信教育センター主幹・指導主事

算数・数学を取り上げた理由については、その結果が顕著であったことが理由であります。また、算数・数学以外におきましては、小・中学校の国語、理科に関しても同じような相関が見て取れました。今回の調査で算数・数学を取り上げたのは、計画を立てて勉強する項目だけではなく、読書や、その他の項目も同じように、算数・数学の視点で比較・分析でき、結果をお示しできると思ひ、このように取り上げさせていただきました。

福田知弘委員

調査結果の概要30ページ以降について、「児童・生徒質問紙」としまして、アンケートが掲載されておりますが、このアンケートは吹田市が独自で作成されたものなのでしょうか、それとも、全国统一で用意されているものなのでしょうか。また、「将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたいと思ひますか」という質問に対し、回答選択肢が不十分なのではないかと考えます。具体的な職業に就かない、就きたくない、という考え方もあれば、どちらともいえないというような考え方もありますので、多様な選択肢があると考えますがいかがでしょうか。

小林重信教育センター主幹・指導主事

まず、この項目は、吹田市独自のものではなく、全国统一した項目となります。次に、回答の凡例につきましても、「どちらともいえない」を吹田市独自で作成できるものではなく、凡例についても全国共通となっており、それに基づいた分析を進めております。

福田知弘委員

今回は意見にすぎませんが、こちらのアンケート設計が、生徒達にとって、答えにくいものになっているのではないかと考えますので、そういった反省会のようなものがあれば、上に挙げてくことも検討していただきたいと考えます。

小林重信教育センター主幹・指導主事

御意見ありがとうございます。

和田光代委員

調査結果の概要32ページに関する質問なのですが、「前年度までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度活用しましたか」という質問に対しての回答結果につきまして、クラスや学校によって使用頻度に大きな差があると見受けられます。小学校におきまして、回答項目「月1回未満」は3.2%、「月1回以上」は8%、計11.2%、中学校におきましては、「月1回未満」は3.5%、「月1回以上」は16.5%、計20%と

なります。今回このテストを受けたのは小学校6年生と中学校3年生で、小学生が約3,200名、中学生が約2,700名となるので、小学生は約370名、中学生は約540名が月1回程度しかタブレット等を使用していないとみることができます。これに対して、毎日のようにタブレット等を使用している生徒も確認できます。このアンケートが実施されたのが本年度4月、吹田市がタブレットを教育に導入してから約1年になります。この1年間の差はとても大きいものだと考えており、児童・生徒のタブレットへの理解度に差が出ていると見受けられます。この差について、どのように考えておられるのかお聞かせください。

福井将人教育センター所長代理・指導主事

おっしゃっていただきました通り、この差につきましては、対処すべき大きな課題であると捉えておりますので、教育センターといたしましては、情報活用能力の体系表というものを作成し、学校に向け、それぞれの学年の段階において身に付けるべき能力を示しているところです。なお、体系表については、様々な場面、例えば、情報教育推進委員会、情報教育研修等でも示しているところですので、今後も引き続き、周知に努めてまいります。

和田光代委員

やはり、データを取るというのは大切なことですが、ただ単に使用している事実を提示するのではなく、どのような形で、どれほど使われているかという点を把握できなければ、小・中学生の貴重な時間が、情報不鮮明のまま過ぎていくので、それは児童・生徒にとって怖いものだと思います。

どこで学校に向けてお伝えしています、という報告ではなく、明確に、何に、どれほど活用できているか判断できるデータの提示があればよいのではないかと考えております。また、可能であれば実際に実施していただきたいと存じます。

福井将人教育センター所長代理・指導主事

実際にそのような実態を把握するという事は非常に大事だと考えております。同時に、このデータに基づいて指導するという事についても、非常に大事だと考えておりますので、教育センターとしましても、この情報活用能力の体系表に基づいたアンケートを今後実施していくことに加え、アンケートで得たデータに基づいて、学校に対して働きかけてまいります。また、現在、1年に1回という頻度でICT活用等に関するアンケートも取らせていただいておりますので、その結果に基づきましても、今後、指導、働きかけを行っていきたいと思っております。

飴野仁子委員

報告書から、考える力について、ふたつの側面から気づくことができました。

1点目はいわゆる学力についてです。例えば、調査結果の概要18ページにつきまして、小学校の算数を例に挙げますが、Pick up 問題である「変化と関係」領域において、「約7割の児童が、数量が2分の1になると、同様に割合も2分の1になると誤ってとらえており」や、同じ比較として中学校の数学について、21ページにつきまして、「数と式」「関数」領域において無回答率が2割を超えていること、「関数」領域については公式や、計算方法を覚えて使用するのではなく、提示された情報から読み解くような「考える」力が不足しているような記述があります。それを踏まえて30ページの児

童・生徒質問紙の質問「算数[数学]の授業で学習してことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」において、回答項目「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」の割合が、小学校では3割、中学校では5割を超えております。算数・数学以外の教科でも同様な傾向があるのではないかと考えられますが、本当の意味での学力を考慮することや、授業をしている理由というのを考える、ということと乖離があるのではないかと考えます。この報告書を受けて、教育の中身を見直していく必要性や、浮き彫りになった問題点に対して考察し対策していく必要があると思われました。

2点目につきましては、同じく「思考力」についてでございます。

調査結果の概要6ページ「自分との違いを認め合う力」につきまして、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思えますか」などの質問に対する回答を、小・中学校で見た場合、「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」と回答した割合がそれぞれ10%弱となります。友達と協力するのが楽しいと考えていないような子供がいるということが見て取れます。また2割を超える子供達が、自分と違う意見について考えることに対し、後ろ向きな回答をしております。色々な意見があるので多様性を重視しようと呼びかけつつも、こういったところで、考え方の違いがあることや、大きなずれがあることが、あらわになっているのではないかと考えます。教室の中で考えると2割近くの子供達がそう考えているということになり、これは大きな数だと見ております。拡大解釈かもしれませんが、教室の中で起こっている様々な問題の原因の一端に関わってくるかもしれないと感じております。約7割の児童・生徒が、友達と協力することや自分と違う意見について考えることが楽しいと感じていると、肯定的な表現をなされていると解釈いたしますが、そこに含まれていない子供達をどのように受け止めていくのか、或いは水面下で見えていないところなども、教育の中で、学校の中で問題が起きているのかもしれないというような捉え方もできるのではないかと思います。このことに関連して、「あなたの学級では学級生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見の良さを生かして解決方法を決めていますか」という質問項目がありますが、まさしくこの学級会で話し合うことが非常に大切になると思われまます。もしかしたら教員の方と子供達の間で考え方のギャップがあるのかもしれないし、また或いは子供達のほうが敏感な面もあるのかもしれない。様々な捉え方があるのではないのかと、この2つの質問項目を見て思いました。先ほどのタブレット・PCの使用状況につきましても、今後、指導する側のフォロー、使い方自体の改善等も多角的に見ていけると良いのではないかと考えている次第でございます。

草場敦子教育センター所長

飴野委員がおっしゃってくださった、普段見えていない、また、クローズアップされていない子供達の実態や意図的に見ようとしないと見えてこない子供達の様子は、データで見るとやはり表れてくるのではないかと思います。したがって、このマイノリティな部分にしっかりと焦点を当てて、そこにはどのような背景があるのか、どのような物事があるのだろうか、という点に関しましては向き合っていかなければならないと考えております。

学力に関しまして、考える力を学力として捉え、なぜ勉強をするのか、なぜ生きているのか、といった哲学的な問いなど、意図的に意識しないと考える機会がないと思います。子供達にとって必要な「考える力」、それは教職員にとっても必要な力であると認識しております。データとして可視化し、教育について考えていく必要があると思っております。また、教職員研修をはじめとし、そのような場は作っていきたいと考えております。

飴野仁子委員

大半を占めているマジョリティなものではないかもしれませんが、今、実際に学校の中で起きている様々ないじめ問題や、学級の中で起きている様々な困難な問題が、一部分でも、ここから見えてくることがあると思いますので、そのようなところも拾っていくことができたらと思っております。

なぜ学ぶのか、数学だけではなく、ほかの科目につきましても考える機会を設けるべきですし、読解力や、その他の力についても、意識的に捉えようとすることで、見えてくることがあると思います。教育現場では様々なことの対応を迫られて大変な状況ではあるかと思いますが、当該結果にこのような問題が含まれているということ認識し、問題意識をもって挑むのと、全く把握していないのでは、見方や対応が変わってくると思いますので、そのような意識改革がこれから必要になると考える次第です。

西川俊孝教育長

御意見ということでよろしいでしょうか。

飴野仁子委員

改善を求めます。

西川俊孝教育長

改善を求めるということで、この件についてはその方向でよろしいでしょうか。

草場敦子教育センター所長

はい。

谷池雅子委員

確認をさせていただきたいことが、3点ございます。

まず1点目は広報の対象で、この概要を主に誰に読んでいただきたいのかということ、もう少し整理をしていただきたく存じます。例えば前回の調査から指導要項が変わった点も踏まえながら、前回どのような取組をしたのかについても含めて、簡単な概略をまず書いていただければ読みやすいかと思えます。

2点目は、令和4年度の対象者3,000人という数に、膨大な数のデータがあるので、この中でまずやはりきちんと記述統計以外の解析をしていただきたいと思えます。例えば、34ページの「学校に行くには楽しいと思えますか」という問いに対し、約2割の子供達が「楽しくない」といった回答をしています。この結果の背景には何があるのか注視して欲しいです。

33ページの「人が困っている時は、進んで助けていますか」「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」「人の役に立つ人間になりたいと思えますか」、こういった問いかけに否定的な回答をする子供はどのような子供なのだろうかと、考えさせられます。34ページ「将来の夢や目標を持っていますか」といった問いも含めて、こうした問いかけに否定的な回答をする子供は、学力結果が低く自信のない子供に偏ってはいないかどうか、こういった観点によってデータを解析する必要があり、この解析結果から出た関連の有無によって今後の取るべき具体的対処方法が変わってくると

考えます。そこで、まずは、令和4年度のデータを取りきることが先決して行うべき事項であると思います。今回の提案から、次の調査結果を受け、どのような指標の変化があったのか、縦断的な変化も拾っていただきたいと考えます。

西川俊孝教育長

前回との比較、流れ、コロナの状況による関連性、そのようなことも盛り込んだ方が分かりやすいのではないかと、という御意見もありましたが、いかがでしょうか。

草場敦子教育センター所長

3点挙げていただいたので、1点ずつお話させていただきたいと思います。

1点目の広報の対象については、市民の皆様とさせていただいております。市民の皆様に、全国学力学習状況調査から見える吹田市の子供達の様子について、お知らせする必要があるかと考えています。よりよい理解を求めするために、どのような形態をとっていくべきかという課題も含めて、再検討させていただきます。コロナによって社会状況に大きな変革があり、その社会状況が教育にも大きく影響することは間違いありません。概論として付け加えて書くことにより、理解を得ることができるのであればそのようにさせていただきます。

2点目のデータ分析については、ここには書ききれていない分析もありますが、教職員が責任を持って、多角的にデータを見つめ分析していくことはとても大事なことだと思います。引き続き継続して、課題として、受けとめて取り組んでいくべきであると認識しております。

3点目ですが、否定的回答している子供達が重なっていないかについてはとても大事なところだと私達も認識しております。

子供のどのような背景により心のエネルギーが貯めることができず夢を持ってなくなっているのか、背景については学校と連携しないとなかなか難しいところではありますが、できることから取り組みを進め、子供のためにこのデータは使わないといけないと思います。

また、PDCAを働かせることについてですが、昨年度ここで論を張っていただいたことがあります。例えば、将来の夢はなぜ持てないのかということについて、様々な論を張っていただきました。

そのことを受けて、今年度は学校アンケートの結果に注目し、考察を行ってみました。残念ながら、おそらくコロナの影響だと思うのですが、子供達に直接将来や夢を持てるような時間をあまりとれてないという回答が多くありました。

この回答データを大事に、連続してあがっているこの課題について考えていかなければならないと感じております。

安達友基子教育長職務代理者

過去のデータから、否定的な回答割合が変わっていない点が気になっております。先程の谷池委員の話にもあったように、33ページの一番上「自分にはよいところがあると思いますか」という質問の回答について、吹田市の中学生全体の約25%が、否定的なものになっていることが、特に気になっておまして、この割合も前年度から大幅には変わらないかと思っております。

他にも、吹田市が全国と比較し、学力が全国平均を上回っているという点

も以前からずっと変わらないですが、一方で、夢を持っている子の割合が低いこと、自己肯定感が比較的低いこと等も昔からあまり変わっていないと認識しており、それらが何故このまま変わらないのか疑問に感じています。

また、ここで自己肯定感が低い回答している子供達の学力に関するデータ分析についてはより一層積極的に行っていただきたいと思います。先程、先生達の授業をブラッシュアップするための研修を行うということをおっしゃっておられていたかと思いますが、取組内容が、全体的に、きちんと授業についてこられている学力の高い子供達をより引き上げていくことへ、やや傾きがちであると感じる部分があります。最近、他市などでも広く話を聞く中で、授業についてこられていない子供達へのボトムアップをどうしていくのかということにも、もっと目を向け、取組の比重がいくようにすれば、もしかしたら、自己肯定感が低い回答の数字が変わってくるかもしれないと感じます。そこまで単純な問題でもないかもしれないですが、学校教育ですので、そういったところも大事にしてもらえたらと考えております。

草場敦子教育センター所長

自分にはよいところがありますかという問いに関する肯定的な回答率がなかなか上がってこない現状です。

現行の学習指導要領において子供が問いをもち、考える授業が求められています。

つまり、授業をまず変えないといけない、教員の意識を変えないといけないことから、この事業に取り組んでいます。子供達の様子から、自分がどういう人間であり、自分は何ができて何ができないのか、できない自分も自分自身であり、できない自分も認めて大事にする、このような思考に至るには自分軸が育っていないと、難しいのではないかと教員と話をしたことがあります。

自己肯定感に関し肯定的な回答を行う子供達の割合や夢を持てる子供達の割合が上がっていくのではないかと考えております。そのためには、しっかりとこの事業に取り組んでいかなければならないと思っております。そして、この事業により始動させた「能力ベースの授業づくり」を、しっかりと吹田の文化にしていきたいと考えております。

谷池雅子委員

この学力は平均値で、レーダーチャートに記載されているかと思うのですが、これらをヒストグラムにすると、綺麗な正規分布になるのでしょうか。成績の悪い子供達と成績の良い子供達とで二本線に分かれたりしないのでしょうか。それらのデータは解析されているのでしょうか。

草場敦子教育センター所長

ヒストグラム等にするとといったことは、できておりません。委員おっしゃるように、視点を変えて、グラフを変えることで、見えてくるものが変わってくるのではないかと思いました。中学校で、今学んでいるデータの活用がまさにおっしゃってくださったものと同様のものなので、今後視点を変えていかなければならないと感じました。ただ、一方で、ヒストグラム等、データを違う形で表すことについて、すぐにできるかどうかについては、この場では判断が難しいとも感じております。必要性はひしひしと感じておりまして、データを別の形で表すことで、見える景色が変わってくるのかもしれない

などは思います。

西川俊孝教育長

これは既に概要が国から示されているという点を踏まえると、今からもう一度新しくヒストグラムを付け加えるということは難しいようです。大まかにはこの概要で進めつつも、委員の方々から意見を頂いた中で、改訂を施し、市民に向けてより分かりやすく背景を示すことが可能であれば、事務局の方で、責任を持って進めさせていただくということで了解いただけたらと思います。

西川俊孝教育長

それでは、この件についてほかに、質問・御意見はございませんか。

西川俊孝教育長

では、この件を承認することに御異議ございませんか。

全委員

異議なし

西川俊孝教育長

この件についての取り扱いにつきましては、事務局の方で臨時代理として対応を行うこととさせていただきます。

それでは、議案第42号令和4年度全国学力学習状況調査、結果概要について、条件付きということで承認をいたします。

西川俊孝教育長

次に、日程第3、教育長報告を議題とします。

内容は①新型コロナウイルス感染症への対応についてです。

事務局の説明を求めます。

まずは学校教育部からです。

角田睦学校教育部次長学校教育部室長兼務

追加議事日程第3教育長報告、新型コロナウイルス感染症についての対応について、まずは学校教育部より御報告いたします。

資料を御覧ください。

まず、本年7月21日から8月12日までに、小中学校において確認された新規感染者は、小学校児童903名、中学校生徒348名、教職員137名の合計1,388名、臨時休業につきましては、この間夏季休業に入ったことからございません。

各学校での感染対策については、7月21日から8月24日まで夏季休業日となるため、夏季休業日の対応に限定して通知しています。

まず、夏季休業日においては、児童・生徒が家庭で過ごす時間が多くなるため、各家庭においても、三密の回避、マスク着用、手洗い、こまめな換気等の感染対策を継続するよう保護者に周知しています。

課外クラブ・部活動については「吹田市課外クラブ・部活動における感染拡大予防ガイドライン」の内容を遵守のうえ活動しています。但し、風邪症状に伴う体調不良者や陽性者が出た場合は、当該の課外クラブ・部活動の活動を見合わせ、状況によっては全ての課外クラブ・部活動を一旦休止することになっております。

また、活動再開にあたっては、感染状況の収束を確認するようにしています。7月28日現在では中学校4校で5つの部活動が一旦停止していましたが、現在は活動を再開しております。夏休みのプールについては、会話を控えること、人との距離を確保することなど「新しい生活様式による水泳指導に関する留意事項」に則り、感染症対策を徹底したうえで、実施しています。但し、感染の広がりが見られる場合は、当該学年の実施を中止する、状

況によっては全学年の実施を中止としています。

現状では小学校31校実施予定でしたが、2校（南山田小、吹田南小）については、教職員や児童の感染状況を踏まえ、全学年で活動を中止しております。以上でございます。

西川俊孝教育長

堀哲郎 地域教育部次長 放課後子ども育成室長兼務

地域教育部から説明を求めます。

留守家庭児童育成室の感染状況についてお伝えをさせていただきます。現在、留守家庭児童育成室につきましては、学校の夏季休業期間ということで1日保育を実施しているところでございます。

まず、感染対策について御説明いたします。資料の2（1）を御覧ください。基本的な感染対策を行いながら、また一方で、行動制限等もされていないということで、デイキャンプや校外育成等の行事につきましては、感染リスクの高い活動をできるだけ控えて実施をしております。

また資料の2（4）に書いておりますけれども、職員につきましては勤務時間外におきましても規律を確保して、感染対策を取るよう進めております。

次に資料の1を御覧ください。感染状況でございますけれども、児童が404名、指導員補助員につきましては57名が感染、臨時休室につきましては7月21日から8月10日で23室を、全室閉めさせていただいたような状態でございます。かなり感染状況が広がっておりまして、今現在、体制が取れないため、閉めさせていただいている状態でございます。

以上です。

西川俊孝教育長

西川俊孝教育長

西川俊孝教育長

それでは、この件について質問・御意見はございませんか。

では教育長報告①を終わります。

それではこれもちまして、本日の議事日程が終了いたしましたので、8月定例教育委員会会議を閉会といたします。

閉会 午後4時45分